2024年６月３日 久宝教会 礼拝メッセージ

「信頼を身をもって示す」　　牛田匡牧師

聖書 ローマの信徒への手紙 10章 5−18節

今回の聖書の言葉は、パウロがローマの教会の人たちに対して書き送った手紙の中の一節でした。「聖書協会共同訳」には、この箇所に対して「万人の救い」という小見出しが付けられていて、「ユダヤ人であるとかギリシア人であるとか、そんなことは救いには関係ない」と記されています。ですが、どうもそれには「条件」があるようです。9 節と 10 節です。「口でイエスは主であると告白し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。実に、人は心で信じて義とされ、口で告白して救われるのです」……。このパウロの言葉のために、まだ言葉を話すことができない赤ちゃんは救われるのか、救われないのか。自分の口で自身の信仰を皆の前でしっかりと告白することがなければならない。などということが、キリスト教の歴史の中では何百年間にも亘って議論されて来ました。

例えば、中世の西欧では洗礼を受けていないと死んだ後に地獄に行くと教会で教えられていましたので、生きている間に洗礼を受けることが必須とされていました。けれども、出産時の事故でそのまま赤ちゃんが死んでしまうことも多くありましたから、赤ちゃんに洗礼を授けるために司祭が間に合わなくても、助産師がその場で洗礼を授けても良いという規定も作られたそうです。そのような具合ですから、もちろん生後間もない赤ちゃんに「信仰の告白」などできるわけはありませんし、教会もその点についてはあまり気にしていなかったようです。その後、宗教改革の時代になると、旧来の地域権力と癒着した慣習的な宗教から、個々人の自覚的な信仰が重要だと舵を切った教派では、「洗礼にあたっての信仰告白」は非常に大切なものとして、受け止め直されて来ました。その結果、「自分で信仰を告白して、意志を表明できない赤ちゃんや小さい子ども、または障がいを持っている人たちは例外とするけれども、それ以外の人たちは、しっかり信仰告白をしてください」というような例外規定を設ける教派と、「いやいや、そんなことは一切認められない。だって聖書の中で、パウロがハッキリと断言しているじゃないか」という教派とに、それぞれに分かれて来ました。しかし、そのような枝葉末節にこだわっていると、本当にパウロが伝えたかったことや、聖書が伝えている福音の本質を取り違えて

しまうのではないかと思います。

17 節には「信仰は聞くことから、聞くことはキリストの言葉によって起こる」とあり、続く 18 節では「その声は全地に、その言葉は世界の果てにまで及んだ」という詩編（19:5）の言葉が引用されています。もともとこの詩編 19 編には、イエス・キリストは登場せず、むしろ神様によって創られた天地万物、それ自体が神様の存在や働きを証言している神の言葉、神の声であると謳われています。ですから、そのことから遡って考えると 17 節の言葉も「イエス様が人々に語られた言葉を聞きなさい」という意味ではなく、「2000 年前にナザレに生まれ、この地上を歩まれたイエス・キリストの姿、生き様、その歩みという出来事それ自体から、信仰は生じて来るのです」ということが述べられているのだと分かります。

そもそもユダヤ教、ヘブライ語の言語感覚では、身体の一部分を指して、身体全体のことを表すということがあったようです。例えば、イエス様の言葉にも「目は体全体のともし火である（体のともし火は目である）」（マタイ 6:22）という言葉もあります。ですから、ここの 9 節と 10 節でパウロが「口でイエスは主であると告白する」と記しているのも、単に「言葉で口に出して言うことが不可欠だ」というのではなく、むしろ身をもって行動で示すことが大切だということなのだろうと思います。

いつの時代でも、どこの社会でも、口で言うだけで何も行動しない人よりも、たとえ寡黙であってもきっちりと行動する人の方が周りの人たちから信頼されたでしょう。また自分自身も、相手のことを「信用している」「信頼している」と言うのであれば、それは自然と行動が伴うものとなったのではないでしょうか。「ヤコブの手紙」の中にも「行いを欠く信仰は死んだものだ」（2:14－17）と書かれています。またイエス様もいつも「私に従いなさい、ついて来なさい」と言って、弟子たちにも自分のようにやってみることを求められました。ある時、イエス様の後について、一緒に旅をしていた弟子たちが、イエス様に対して「私どもの信仰を増して下さい」と言ったことがありましたが、そんな弟子たちに対してイエス様は「（あなた方に）もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この桑の木に『根を抜き、海に植われ』と言えば、言うことを聞くであろう」（ルカ 17:5－6）と答えられました。つまり、「あなたたちにはゴマ粒よりも小さなからし種の一粒ほどにも、自分自身でやってみるという行動が見られないじゃないか。単に私の後ろについて来ているだけで、分かったような、偉くなったような気持ちになっていたら、大間違いだ」と伝えられ

たというわけです。

パウロが記した「ローマの信徒への手紙」に戻りますが、8 節に引用されている「申命記」の言葉「言葉はあなたのすぐ近くにあり、あなたの口に、あなたの心にある」は、正しく訳せば「神を現わす出来事は、あなたの身近にある。あなたの身に、あなたの心にある」（本田哲郎訳）となります。この世界の全ては神様によって創られたものですから、私たちの身近には、いつも神様の働きを表している出来事に満ちあふれています。神様がいつも共にいて下さるということ、だから私たちはどんな時でも決して独りぼっちではなく、見放されていないということ。その事実に信頼して、そうして実際に行動を起こしてみる、歩み出してみることが求められているのだと思います。

10 節にある「実に、人は心で信じて義とされ、口で告白して救われるのです」という言葉は、日本語で正確に翻訳するのは、とても難しいのですが、ここでは「信じる」も「告白する」も、どちらも受動態、受け身の形で書かれています。即ち、自分の意志や力で信じたり、信頼したりするのではなく、神様の方からの一方的な力、出来事によって、信頼させられることによって歩みが起こされ、身をもって表現せずにはいられないようにされる。そうして救われるのだ、というのです。確かに、ふと振り返ってみた時、私たちが心底「あぁ、良かった」「ほっとした」と感じられる時というのは、自分自身の意志と力で何とかやりきった、という時よりも、むしろそのような自分の意志を越えたものによって、思わず突き動かされた先に、「心配していたけど、やってみたら案外できた」「自分一人では出来ないと思っていたけれど、何人もの人が手伝ってくれて無事にやれた」というような時なのではないでしょうか。

「オレオレ詐欺」や「架空請求詐欺」などの「特殊詐欺」が一向に無くなりません。ふと調べてみると「オレオレ詐欺」が登場してからもう 20 年にもなるそうです。毎日、山のように届く架空請求の迷惑メールは、それこそAIなどで様々なメールアドレス宛に自動的に送り付けて来るものなのでしょう。警察からも「知らない人からの電話やメールは信じてはいけません」という注意喚起がなされています。「人を信頼する」というのは人間関係の根本であり、最初であるはずなのに、どうしてこんなおかしなことになってしまったのでしょうか。それは、人から裏切られた、

いじめられ、虐げられたという悪いコミュニケーション、悪い経験や記憶が、再び悪いコミュニケーションを生み出して来ているのではないかと思います。その一方で、人に助けられた、親切にしてもらった、という良質なコミュニケーションもまた再生産をしていくものなのだろうと思います。

「神も仏もあったものか。この世界は悪いこと、絶望することばかりだ」としか思えないような時でも、それでもこの世界を創られた神様は確かに生きておられる。私たちはその神様によって、他でもないその神様と共にあって生かされていると信頼して、歩むこと、その信頼を身をもって示して行くこと。私たちは、今日これからもその力を与えられて、ここから歩み出して行きます。